

世界民族誌と東北旧石器人の文化適応

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2: モノが語る人類誌]⑥

2025年9月27日

講座要旨

今年度の館長講座は、「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡る旅をしています。考古学と歴史の分野を中心に、海外のミュージアムを訪ねつつ、世界史の流れを東北地方と関連させて考えています。今後の内容は、次のように予定しています。⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ。これまでに私が調査研究を行なってきた地域の海外博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れてきました。今月から3回は、私たちの足元の郷土史に戻って、東北の歴史を世界の視点でとらえ直してみようと思います。今年も、お話の中で旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全24回の内容と関連させつつ、参照しました。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

世界史の流れというと漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、通年のテーマとしまして「時代区分」ということの意味を考えています。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、時代区分は「近代」「現代」世界の中ですが、伝統的な生活様式を保持すると考えられてきた多くの民族のエスノグラフィー、すなわち「民族誌」を訪ねます。そして「原始」時代を研究する考古学の、資料解釈の参考とする「民族考古学」分野の枠組みにおいて、東北地方の旧石器時代を考察します。何だか、いろいろな時代が入り組んでいて、ややこしいですが、世界史の大航海時代以降、孤立した地域という実態はどんどん縮小し、いわゆる「世界システム」（ウォーラースteinによる概念）が拡大して、次第に地球を席捲しました。世界の諸民族の独自の文化は、次第に全体システムの一部として「文化変容」が加速しました。

考古学と民族学の融合分野である「民族考古学」(Ethno-archaeology)への大きな批判として、近代以降の文化人類学により記録された「民族誌」が、どれだけ元来の生活様式の情報を伝えているかという問題があります。また、あくまでも「個別の民族誌」が、人類の文化進化の一般的な傾向をどれだけ反映するものかという疑問も、大きな批判点です。民族考古学の提唱者であるルイス・ビンフォードは、静止した考古学資料から、動態である文化復元に向かうための「ミドルレンジセオリー」を主張して、民族考古学の意義を論じました。いわば全地球の人類の経験の総和として、民族誌の集成から法則性の把握へと向かう「辞書作りにあたる」方向を提起したのでした。

館長は、「東北歴史博物館研究紀要」第24号、第25号の論文で、民族考古学の枠組みにより東北地方後期旧石器時代の生活様式を考察する試論を述べました。今回講座で、その一部と趣旨を解説したいと思います。ビンフォードによれば、世界の狩猟採集民の民族誌を集めると、実際の環境条件と生業経済は非常に多様であるにもかかわらず、大きく二つの類型に大別できます。フォレイジャー型およびコレクター型と総称する生活様式です。ごくざっくりと、前者は小集団全体が食料資源の動向に対応して頻繁に滞在地を移動していく型、後者は食料資源の時間的分布（季節）と空間的分布（生息地の多様さ）との間の不均衡を軽減するために、変動する集団編成（離合集散）、季節的な移動と地点回帰、特定資源への集中（集約的なトナカイ狩猟など）、食料の貯蔵行動（端境期の軽減）、保存方策などを組み合わせた、たいへん複雑な生業形態をもつ型です。前者の典型例は、アフリカ南部のブッシュマン、後者の典型例は、アラスカのヌナミュー・エスキモーがあげられます。

両者の大別に対応して、結果として生じる考古学資料の性格にも相異が表れます。再度ざっくりとですが、フォレイジャー型の場合には、同様な性格の遺跡が多数、並列して存在し、個々の規模は小さく、遺跡の内部構造はシンプルな傾向があります。コレクター型の場合には、さまざまに内容が相異なる遺跡が、同じ時間的・空間的範囲のなかに共存する、すなわち同じ編年かつ地域的な枠組みの中において「多様性」が顕著となります。また遺跡には、さまざまな「遺跡の構造」や「内部的な多様性」が顕著になり、集約的な狩猟採集の活動や食料の加工処理行動、貯蔵活動などを示す遺構が出現します。東北地方の後期旧石器時代遺跡を総合的に見ますと、後期旧石器時代後半に至って、コレクター型の生活様式を特徴づける要素が豊富に表れるようです。仙台市富沢遺跡の、限られた狩猟活動部分を示す遺構（炉の周囲での石器装備の補充と野営）、山田上ノ台遺跡の、異なる石器石材の母岩が、平面的に構造を有して分布している状況、多くの遺跡での在地性の石材と遠隔地性の石材との使い分け、村田盆地周辺での特定の石材（玉髓）の集中使用、仙台市上ノ原山遺跡上層での、山形県地域に由来する良質の珪質頁岩による発達した石刃技法、など多くの事例を挙げることができます。一方で、約3万年前までの後期旧石器時代前半期には、このような要素は比較的希薄で、石器集中部が環状に分布する現象（秋田市地蔵田遺跡）、在地性の多様な石材の利用（会津若松市笹山原No.16遺跡）など、フォレイジャー型を示唆する現象が多いようです。すなわち、新人が東北地方に出現してから、約1万年の間に、真正の石刃技法の

発達を伴って、良質の頁岩を保持しながら移動・回帰するシステムへの変化が認められると考察しました。なお仮説の検証は、今後の課題として残っています。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、項目的に紹介します。

・まず、今回講座の「お題」です。前回は、アメリカの西部開拓期からの歴史を見ながら、「近代」という時代の特質を探ってみました。歴史博物館グローバル紀行として、ミズーリ州セントルイスにある二つの地方博物館を訪ねる旅でした。博物館展示を通して、フロンティアの現実と、地方都市の発展と変貌を考えました。今回は、「現代」社会的一面でもある「民族誌的現在」(“ethnographic present”)の世界を考えてみます。現代において、さまざまな多様な文化が併存し、一方で世界の画一化がとめどもなく進行しています。その中で、かつて「未開社会」と言われてきた多くの伝統的文化を保持する社会は、民族学によって研究されてきました。今回講座では、狩猟採集という生業経済を保持してきた多くの文化の民族誌研究から、比較研究によって明らかにされてきた文化の共通性と変異を考えます。そして、同じ狩猟採集という生業経済であった、はるかな太古の「旧石器時代」の文化の性格を考えます。

このような研究方向は、アメリカの考古人類学者であった「ルイス・ビンフォード」氏によって、体系化が進められました。館長は、すでに故人となったビンフォード氏に直接師事することができた唯一の日本人留学生でした。その経験を総合して、東北歴史博物館紀要(2023、2024)で、東北地方の後期旧石器時代人の文化についての考察を行ないました。今回はそれらに触れながら、「原始時代」について考えてみます。このような分野は、「民族考古学」と呼ばれます。多くの批判も存在する研究方向です。それについても考えてみます。すなわち今回は、特定の海外博物館の探訪というよりも、世界と日本の多くの資料を総合しながら、この課題を考えてきます。

・スライドは、仙台市富沢遺跡での旧石器人の復元画と、スクリーンの映像展示を編集する際の実写版です(© 地底の森ミュージアム 1996)。発掘調査の結果から、人間が登場するワンシーンへの変換が、この課題でした。かつてビンフォードは、世界の学界に向けて、鋭い指摘を行ないました。1970年代のことです。過去の世界を復元する考古学が暗黙のうちに適用してきた「解釈の基準」、それは、モノからコトへとデータを変換し、人間行動を推定するための、客観的な基準は、いったいどこにあるのでしょうか?という問い合わせでした。

・写真は、ルイス・ビンフォード先生の、米国ニューメキシコ大学の研究室にての姿です。1980年で、私が初めて留学し、かなり緊張しながら先生にお会いして、研究室で撮らせてもらった記念です。ちょうどヌナミユート・エスキモーの調査から帰って、新たな知見を著作にまとめられていたころでした。先生は、2011年4月に逝去されました。79歳でした。

ニューヨークタイムズにも、追悼記事が掲載されました。

「民族考古学」の誕生と展開

- ・ビンフォード（以下敬称略）の代表的な業績に「ミドルレンジセオリー」Middle Range Theory を提唱したことがあります。これは、中範囲の理論と訳されます。静態（考古学的記録）と、動態（当時の生活）との関係を、法則的にとらえる「行動の現場」を記録できる3分野を挙げています。民族考古学、実験考古学、歴史考古学です。（2021年度、館長講座①「比較考古学の地平」で解説。HPでご参照できます）。
- ・一例として、狩猟採集民の居住地移動の比較モデルです（スライド）。「半径連続型」「全景跳躍型」「点から点型」に大別されます（阿子島 1983 「ミドルレンジセオリー」より）。「“辞書”作りを目指す民族考古学」の記事です（科学朝日 1981）。エスキモーの人々にとって、アメリカの北アラスカ地方に残された現代の遺跡の写真です（『Nunamiat Ethnoarchaeology』から）。春のカリブー（アメリカトナカイ）集約的狩猟と解体の場になります。このような研究は、「民族考古学」と呼ばれます。従来の日本考古学には存在しない分野でした。民族考古学の誕生は『ヌナミュー・民族考古学』（1978）が画期と評価されています。北部アラスカで、トナカイ狩猟民を克明に調査して、どのような遺跡が結果として残されるかを研究しました。これは、フランスのランソワ・ボルドとの「ムスチエ文化論争」のあとで、ネアンデルタル人の遺跡の性格をめぐる論争に決着が着かなかつたことから、大きな方向転換を行なったのでした。「私はトナカイ狩猟民たちが、実際にはどういう人々なのかを知らずして、論じていた」という反省の弁も書かれています。（『In Pursuit of the Past』 1983）。
- ・グローバルな民族考古学の成果として代表的な業績に、狩猟採集諸民族の生活様式の二つの大別類型分類があります（Binford 1980）。フォレイジャー型に対してのコレクター型（FORAGER TYPE VS COLLECTOR TYPE）というものです。居住地移動のタイプと頻度、小集団全体と集団の一部の対比、貯蔵行動の一般性と特に寒冷地域での対応、（それは端境期の存在に関連）、食料資源の安定性、資源の分布の一様性と片寄り。残される遺跡の種類の多様性などに着目しました。これらは、環境の状況に対する人類の適応の二つの局面、すなわち方策であって、段階的な文化進化というわけではありません。典型例として、フォレイジャー型のブッシュマン（サン諸族）や熱帯雨林の採集狩猟民が、コレクター型のヌナミュー・エスキモーがあげられています。
- ・1960年代は、伝統的な生活様式が、まさに消えようとしている時代でした。歴史的・社会的には、さまざまな評価はありますが、多くの民族学者が、世界各地で生活を記録しました。狩猟採集生活の実際の姿を記録したのです。人間集団と、環境との関係に注目する動向がありました（生態人類学という分野です）。写真は1968年、若き日のビンフォード（右端）で、ヌナミュー・エスキモーの中で生活しました。
- ・民族考古学での狩猟民キャンプの画期的研究は、イエレン 1978 『現在への考古学的アプ

ローチ』の中での、ブッシュマン（サン族）の研究でした。遺物の分布と生活活動を克明に記録していきました。1960 年代以降には、世界各地の狩猟採集民族の「人類生態学」という視点からの研究が蓄積されました。生業活動と環境との間の相関関係を把握していく方向です。日本人では、田中二郎氏（京大）のブッシュマン研究は、世界的業績と言えます。

- ・図は、ヌナミュート・エスキモーの調査事例で、炉（焚き火）の周囲での着座モデルです。現代の民族誌で、「マスク遺跡」です。これは、富沢遺跡保存館の展示に応用されています。（Binford, 1978, *American Antiquity*, 43）。

- ・ビンフォードにとって、狩猟採集諸民族 Hunter gatherers の集成研究は、まさにライフワークというべきものでした。1980 年代の館長留学中にも、大学院セミナーで直接に、お考えに接する機会を得た幸運がありました。1983 年の著書『考古学を業として』（Working at Archaeology）には、1970 年代の民族考古学の分野を中心とした論考をまとめてあります。フォレイジャー型とコレクター型についての考察も、この本に所収で「柳の煙と犬のしつぽ」という不思議に思える題名でした。もともとは *American Antiquity* (1980) に掲載のものです。また 2001 年刊行の大著『参照する枠組みの構築』（Constructing Frames of Reference）では、地球上の狩猟採集（漁労）民の民族誌を集めて、約 340 の民族について、統計的手法を取り入れて分析しました。数百の民族誌から信頼性を評価し選択したものです。環境を構成する諸条件、人びとの移動パターン、集団の構成、主要な生業の多様性、貯蔵の行為、各種技術、生活様式の特徴、などの「変数」を設定して、それぞれの要因の相互関係の中に、法則的な相関を追及し、多くの規則性を解明して、定式化しました。

世界の狩猟採集民

- ・ここで、地球上の狩猟採集民の人々から、一般によく知られている民族について、少し紹介したいと思います（多数のスライドは、公開されている写真から）。
- ・狩猟採集という生活文化は、旧石器時代には人類の 100 パーセントが行なっていた生業でしたが、次第に農耕、牧畜が広がって、それらに適さない環境が、狩猟採集（漁労）民の生活領域となった人類誌がありました。民族考古学の資料である「民族誌」 ethnography では、そのような環境的な「辺境」地域の人々が、主要な内容となります。すなわち、後期旧石器時代のヨーロッパや、パレオインディアン文化期の北米のように、多くの動物資源に満ちあふれた世界は、民族誌的現在には、どこにも全く存在していないことに注意が必要です。このことは、民族考古学という新しい分野への批判点ともなっています。
- ・ハッザ族です。タンザニアのエヤシ湖周辺に居住しています。人口は 1200～1300 人まで減少していました。弓矢で狩猟を行なう姿です。
- ・セマン族です。セノイ族と共に、マレー半島の狩猟採集民として、古くから知られてきました。小柄で、縮毛で、皮膚が暗色の、ネグリット Negrito といわれる人々の仲間です。マレーシア、マレー半島北部の山岳地帯に居住しています。平地に居住する一部は「サカイ族」としても知られます。弓矢、それに吹き矢を使用して、サル、リス、などを狩猟します。

ヤムイモ、果実などを採集して生活します。親族の組織は、双系制出自です。双系制とは、母方、父方の双方をたどるしくみです。

・ヤノマミ族です。アマゾンの熱帯雨林地帯に居住しています。狩猟、採集、漁労、に加えて焼畑農耕を営む人々です。キヤッサバ、バナナなどです。ブラジルとベネズエラに約2800人が暮らしています。疫病などで人口が減少してしまいました。外部との接触が少ない人々です。住居は、円形のシャボノと呼ばれる集合的な構造で、その中に共同体の成員の多くが、まとまって住むことで知られます。ヤノマミ族の人々は、塩分の摂取量が非常に少なく、血圧が低いことから、医学分野では、塩分摂取量と高血圧との関係で、疫学的な検討の対象とされました。

・ピグミーの人々です。ピグミーとは、多くの部族の総称で、ピグミー族という人々は存在しません。アフリカ中部に住む、体格が小型の人々を指す言葉です。(動物種などでも、小型の種類を「ピグミー〇〇」と呼んだりします。ピグミー・チンパンジーなどです)。低身長とは、1.5m程度よりも小さい人びとです。欧米人たちとの記念写真をご覧ください。赤道直下の熱帯雨林に居住します。バヤカ族、バカ族、アカ族などの人々がいます。コンゴ盆地の東部(コンゴ民主共和国)で、イトゥーリの森にすむ、ムブティ・ピグミーは、コリン・ターンブルによる『森の民～コンゴ・ピグミーとの3年間』で記述されました。イトゥーリには、エッフェ・ピグミーも居住しています。写真のような、木の枝を組み合わせた骨組みに、草をかぶせた住居が、円形に並ぶ集落を構成します。

・ナンビクワラ族です。ブラジル西部の、マト・グロッソ高原で生活しています。30人ほどの小集団で移動生活を行ない、漂泊の狩猟採集民とされてきました。近年、雨季には焼畑農耕を行なうことが調査されています。乾季に移動して狩猟採集生活を行ないます。衣服を着ることがなく、家財は最小限で、女性が背負う大きなカゴに、すべてを入れて移動されます。地面にそのまま寝る生活で、ウアイコアコレという名称は、「地べたに寝る人々」の意ということです。きわめて単純な物質文化で知られます。「氏族」とその集合「部族」の組織があって、氏族外婚を行ないます。レヴィ=ストロースの理論で、婚姻は集団の間での女性の交換という構造を有するという、構造主義学説の資料になった部族のひとつです。『悲しき熱帯』は、レヴィ=ストロースの名著です。1955年刊行で、川田順造訳があります。ブラジルでの経験からの、総合的な著作です。「電信線に沿って」の章で、ナンビクワラ族を描写しています。すでに焼畑農耕についても記述していました。他に、カデュヴェオ族(カドヴェオ族)、ボロロ族、トウピ・カワヒブ族、と接触しました。この書は、非常に文学的な、余韻に富んだ名著で、自伝的部分も含みます。

・クロード・レヴィ=ストロース(Claude Levi-Strauss 1908~2009年)。享年100歳でした。フランスを代表する人類学者です。「構造主義人類学」の理論で有名です。コレージュ・ド・フランス教授でした。20歳代でブラジル・サンパウロ大学に職を得て、ブラジル奥地の先住民族を調査しました。1938年、ナンビクワラ族と接触しました。主著に『親族の基本構造』『構造人類学』『野生の思考』『生のモノと調理したモノ』など非常に多数あり

ます。伝統的社會における婚姻關係を、氏族などの集団間の「女性の交換システム」として理解する理論を發表し、1960 年代から、「構造主義」の旗手として、人類學界のみならず、思想界にも大きな影響を与えました。日本にも 3 度來訪しています。20 世紀を代表する知識人です。写真右は、1930 年代のブラジル調査時の若き日の姿です。写真左の晩年も旺盛な言論活動を續けました。

・オーストラリア原住民（アボリジニ諸族）。アルンタ族は、オーストラリア中央砂漠に居住、移動する狩猟採集民です。シンプルな物質文化と、非常に複雑な親族組織の体系、トーテミズム、氏族組織（クラン）を持っています。スライドは、アルンタ族の居住小屋と「歓迎の踊り」のようすです。ビンフォードは、オーストラリアのオコンネル教授らと、アボリジニ諸族のうち、特に「アルヤワラ族」 Alyawara を調査しました。現代も石器を製作する人々です。多くの民族考古学の論考が、アルヤワラ族について記述しています。石器の原材料、加工技術、樹脂の加熱、キャンプでの「捨て方」、移動と場所の意味などに関する論考です。

ラドクリフ＝ブラウンとマリノフスキー

・アンダマン諸島民です。インド洋東部の、隔絶した島々に居住する、ネグリット系の人々です。18 世紀末に外部世界と接触した時の人口は約 7000 人と推定されます。現在は 500 人ほどに激減してしまっています。外部との関係が歴史的に薄く、免疫が欠落していることがあります。また外部からのさまざまな影響によるものでした。大アンダマン系とオンガン系部族、センチネル族などに分かれます。構造機能主義人類学者、ラドクリフ＝ブラウンの研究が有名です。左は 1903 年以前に撮影されたカヌー文化と人々のようすです。弓矢を使用して、ウミガメの漁を行なう姿です。右はジャンギル族の小屋、19 世紀末の撮影です。左は大アンダマン系部族の男たちで、1875 年です。北センチネル島人は、外部に対して弓矢で攻撃するなど、排外的な行動で知られました。インド政府は隔離政策をとって、島への立ち入りを禁止した歴史もあります。病気に弱いからという理由もあるとのこと。2018 年に、宣教師が殺される事件が発生しました。

・ラドクリフ＝ブラウン（Alfred Radcliffe-Brown, 1881～1955）です。『アンダマン諸島民』（1922）を著わしました。1906～1908 年に、アンダマン諸島でフィールドワークを行ないました。現代人類学の確立者の一人と言えます。イギリスの「社会人類学」の基礎を築きました。制度・慣習と社会構造との整合性、文化の全体性を論じました。「構造機能主義」の祖と位置づけられています。なお、この学派は先述のレヴィ＝ストロースの「構造主義」とは、名前こそ似ていますが、別の学派です。シドニー大学、オックスフォード大学などで、人類学講座を歴任しました。フランス社会学のデュルケームの理論を民族学分野で発展させました。親族關係が、社会全体の維持・統合に果たす役割を論じました。「南アフリカにおける母の兄弟」（1924）などがあります。

・ラドクリフ＝ブラウンに触れたら、もう一人の現代人類学の確立者、マリノフスキーにも

触れなければなりません。マリノフスキー (Branislaw Malinowski, 1884~1942) は、ラドクリフ＝ブラウンと並び称される、現代人類学（機能主義）の確立者です。参与観察（長期的なフィールドワーク）による民族誌学の方法論の基礎を築きました。『西太平洋の遠洋航海者』(1922) という学史上に輝く名著は、ニューギニア東方海上のトロブリアンド諸島での、大規模な交易ネットワーク クラ (KULA) を分析したものです。首飾り（時計回り）と腕輪（反時計回り）とが、円環状に逆向きに交易される儀礼的なシステムです。農耕民（タロイモ、ヤムイモ）で、ブタ飼育、漁業を行ないます。マリノフスキーモデルは、人間の基本的欲求と制度・慣習の理論で、文化を理解するための統合的全体論といえます（『文化の科学的理論』など）。

東北地方後期旧石器時代の文化的適応

- ・この論題について、まず館長の独自仮説を述べ、事例を参照していきます。左スライドは新庄市上ミ野 A 遺跡の石刃石器群、右はクロマニヨン人の生活面遺構（フランス・ドゥフオール岩陰遺跡）です。また新潟県上ノ平遺跡 C 地点のナイフ形石器（新潟県埋蔵文化財調査事業団）です。このような遺跡を残した人々は、どのような適応の方策を持っていたのでしょうか。後期旧石器時代後半期の石刃石器群について、人類集団の適応様式を考える試論です。民族考古学の成果を応用しました。フォレイジャータイプとコレクタータイプの適応様式（居住地移動と生業活動）をモデル化し、東北日本を考えました。
- ・先にもご説明しましたように、民族考古学の資料は、多くは極限的な環境下の文化事例です。西ヨーロッパの後期旧石器時代のハンターたちのような、豊かな環境下での狩猟採集民の事例は、すでに消滅しています。そこで民族考古学では、環境条件と適応様式との関係の法則化へと論を進めます。
- ・「石刃石器群コレクタータイプ適応仮説」として提示しました。後期旧石器時代の石刃石器群の集団の多くは、コレクタータイプの居住様式に近い生活を確立していた可能性を指摘しました。東日本の後期旧石器時代初期から前半（約4万年～3万年前、AT 降灰以前の時期）、すなわち環状ブロック群が多出する時期には、大型動物に対応して、小集団全体が移動するフォレイジャータイプの適応形態であった可能性を指摘しました。今後、各遺跡における人間行動の復元と遺跡ごとの多様性の検討が必要です。
- ・ヨーロッパと日本列島に共通の文化現象であったと考えています。（講座では、フランスのマドレーヌ文化の遺跡、パンスヴァン遺跡やエチオール遺跡など、スペインのカンタブリア地方での人間集団の適応方策モデル、ローレンス・ストラウスによるモデルを、詳しくご紹介しました。）
- ・図は、モニカ・オリーヴ他（1991）によるパリ盆地での居住様式（Settlement pattern）の、重層性の考え方です。各キャンプ地、その内部構造、滞在地の組み合わせと、季節的移動のパターン、年間移動地域、別の集団との関係、そしてパリ盆地からフランスの他の地域との相互関係や、集団による長距離の移動、などを説明します。すなわち、人間活動は、一

つの遺跡では完結しないことを、常に考える必要があるということです。集団の居住様式について、「移動か定住か」というような、二者択一的なモデルでは、実際の複雑な行動様式を説明することはできません。

・このようなヨーロッパ旧石器時代に認められる人間集団の適応方策は、東北地方でも後期旧石器時代の後半には、かなり確立していたと考えています。奥羽山系の東西での良質な石器石材の移動（頁岩）、宮城県側での、在地系石材の便利的な使用（石英安山岩、玉髓）と、遠隔地石材の選択的な使用（ナイフ形石器など）、装備の補修行動の形跡が認められます。遺跡が短期的な滞在地キャンプの様相を示す事例が多出します。

・東北日本においては、それに先立つ数千年間（約 38000 年前～ 30000 年前）の間、大型動物の移動に対応して、集団全体が移動する、「フォレイジャー型」の文化的な適応形態が支配的であったと考えます。そして次第に文化進化があり、石刃技法の発達と規則的な移動システムが確立されたという仮説です。

・詳しくは、「東北歴史博物館研究紀要」第 24 卷（2023 年 3 月）

阿子島香（東北地方後期旧石器時代における人類集団の適応戦略）Kaoru Akoshima “Human adaptive strategy in the Upper Palaeolithic of Tohoku District”. Pp.1-10. を参照ください。日本語の解説「付編」が付いています。どなたもダウンロードできます。

（スライドで、富沢遺跡 1994 年調査、東北大学考古学研究室による最上川プロジェクトの遺跡と編年表、新庄市上ミ野 A 遺跡 1987、1991、2000 年調査、同白山 E 遺跡、同白山 B 遺跡、加美町薬菜原 No.15 遺跡、仙台市山田上ノ台遺跡 2002 年調査、仙台市上ノ原山遺跡上層、などを紹介しました。）

・また、引き続き詳しくは、もう 1 編

「東北歴史博物館研究紀要」第 25 卷（2024 年 3 月）

阿子島香（東北地方後期旧石器時代前半における人類集団の適応戦略）

Kaoru Akoshima “Human adaptive strategy in the Early Upper Palaeolithic of Tohoku District”. Pp.1-10. も参照くだされば幸いです。

日本語の解説「付編」が付いています。こちらも、どなたもダウンロードできます。

（スライドで、山形県真室川町丸森 I 遺跡、仙台市上ノ原山遺跡下層、加美町砂坂遺跡、同薬菜山 No.17 遺跡、会津若松市笛山原 No.16 遺跡、秋田市地蔵田遺跡、などを紹介しました。）

ご清聴いただき（最後までお読みいただき）、ありがとうございました。今年度の館長講座も、あと残り 2 回となりました。引き続きよろしくお願ひいたします。

（本稿は、館長講座での配布資料に大きく補足したものです。）